

# 製紙業界の違法伐採対策の取り組み状況について (2019 年度)

2020 年 12 月 21 日  
日本製紙連合会

## 1. はじめに

製紙業界における違法伐採対策は、「違法伐採対策に係る林野庁のガイドライン」に基づき、「個別企業の独自の取り組みによる方法」で各社自主的に行われていたが、2007 年度にこれらの取り組みに客観性と信頼性を担保させるため、製紙連合会が会員企業の違法伐採対策をモニタリングするとともに、その結果について、第三者委員会の指導、助言及び監査を求める「違法伐採対策モニタリング事業」を開始し、業界全体としての違法伐採対策のレベルアップに努めてきた。

2016 年 5 月 20 日に制定された「合法伐採木材等の利用及び流通の促進に関する法律（クリーンウッド法）」（2017 年 5 月 20 日より施行）においては、木材及び木材製品を取り扱う事業者は、官需、民需を問わず、全て木材、木材製品の合法性を確認するよう努めなければならないことになり、このクリーンウッド法の制定に対応して、合法性確認の強化を図る観点から、会員各社が自ら合法性の確認（デュエディリジェンス：DD）を行うために、日本製紙連合会は合法証明 DD システムマニュアルを作成し、このマニュアルに基づいて各社は独自の合法証明 DD システムを作成した。

昨年度からは、各社が自社の合法証明 DD システムに基づき、調達する原料の合法性を確認しており、その結果を、製紙連合会が違法伐採対策モニタリング事業として調査を行っている。

今年度は、9 月から 10 月にかけて 30 社（グループの場合は代表会社）に対して、2019 年度の取り組みについて製紙連事務局員による第 14 回のモニタリングを実施した。その結果の概要は以下の通りである。

## 2. 製紙業界の違法伐採対策の実施状況

2020年12月現在、違法伐採対策モニタリング事業に参加している会員企業及びその関連企業は下記の30社である。

企業名	URL
OCM ファイバートレーディング株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子木材緑化株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子グリーンリソース株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子製紙株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子マテリア株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子エフテックス株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子イメージングメディア株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子ネピア株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子キノクロス株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子グリーンエネルギー江別株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
王子グリーンエネルギー日南株式会社	<a href="https://www.ojiholdings.co.jp/">https://www.ojiholdings.co.jp/</a> (王子グループ)
大阪製紙株式会社	<a href="http://www.osaka-paper.co.jp/">http://www.osaka-paper.co.jp/</a>
大王製紙株式会社	<a href="https://www.daio-paper.co.jp/">https://www.daio-paper.co.jp/</a>
中越パルプ工業株式会社	<a href="http://www.chuetsu-pulp.co.jp/">http://www.chuetsu-pulp.co.jp/</a> (中越パルプ工業グループ)
中越パルプ木材株式会社	<a href="http://www.chuetsu-pulp.co.jp/">http://www.chuetsu-pulp.co.jp/</a> (中越パルプ工業グループ)
中越緑化株式会社	<a href="http://www.chuetsu-pulp.co.jp/">http://www.chuetsu-pulp.co.jp/</a> (中越パルプ工業グループ)
特種東海製紙株式会社	<a href="https://www.tt-paper.co.jp/">https://www.tt-paper.co.jp/</a> (特種東海製紙グループ)
新東海製紙株式会社	<a href="https://www.tt-paper.co.jp/">https://www.tt-paper.co.jp/</a> (特種東海製紙グループ)

日本製紙株式会社	<a href="https://www.nipponpapergroup.com/">https://www.nipponpapergroup.com/</a> (日本製紙グループ)
日本製紙パピリア株式会社	<a href="https://www.nipponpapergroup.com/">https://www.nipponpapergroup.com/</a> (日本製紙グループ)
日本製紙クレシア株式会社	<a href="https://www.nipponpapergroup.com/">https://www.nipponpapergroup.com/</a> (日本製紙グループ)
兵庫パルプ工業株式会社	<a href="http://hyogopulp.co.jp/">http://hyogopulp.co.jp/</a>
北越コーポレーション株式会社	<a href="http://www.hokuetsucorp.com">http://www.hokuetsucorp.com</a> (北越コーポレーショングループ)
北越東洋ファイバー株式会社	<a href="http://www.hokuetsucorp.com">http://www.hokuetsucorp.com</a> (北越コーポレーショングループ)
丸三製紙株式会社	<a href="http://www.marusan-paper.co.jp/">http://www.marusan-paper.co.jp/</a>
丸住製紙株式会社	<a href="http://www.marusumi.co.jp/">http://www.marusumi.co.jp/</a>
三菱製紙株式会社	<a href="https://www.mpm.co.jp/">https://www.mpm.co.jp/</a>
リントック株式会社	<a href="http://www.lintec.co.jp/">http://www.lintec.co.jp/</a>
レンゴ株式会社	<a href="https://www.rengo.co.jp/">https://www.rengo.co.jp/</a> (レンゴグループ)
レンゴペーパービジネス株式会社	<a href="https://www.rengo.co.jp/">https://www.rengo.co.jp/</a> (レンゴグループ)

### 3. 違法伐採対策モニタリング事業の調査結果

今年度の違法伐採対策モニタリング事業の調査結果は以下の通り。

#### (1) 日本製紙連合会事務局によるモニタリング結果

- ・ 各社の違法伐採対策は、いずれも、各社の事情を踏まえながら、原料調達方針を策定するとともに、合法証明システムとしてサプライヤーと覚書等を締結し（ただし森林認証による証明を行っている場合は任意）、トレーサビリティレポートを提出してもらい、現地確認を行うなど、林野庁のガイドラインに基づき適切に実施されている。
- ・ 現地調査結果の文書化やトレーサビリティレポートの記載内容の充実など、過去のモニタリングの指摘事項を踏まえた改善が引き続き着実に進められている。
- ・ 輸入されるパルプ材及びパルプについては、その全てを森林認証材あるいは森林認証制度の下で認証された管理木材（CW）で対応

する企業がほとんどとなっている。しかしながら、新たなクリーンウッド法では合法証明のための DD システムの運用において、森林認証に加えサプライチェーン情報の収集が求められているため、各社においては森林認証と並行してトレーサビリティレポートを入手するなど概ねリスクアセスメントが適切に実施されている。

- ・ 国産木材チップについては、覚書等を締結し、トレーサビリティレポートを提出してもらい取り組みを基本とする会社と、木材チップ業者の団体認定による合法証明を活用する取り組みを基本とする会社があるが、全体としてよく取り組みが行われている。

## (2) 監査委員会の結果

さらに、2020年12月2日に監査委員会を開催して、上記モニタリング結果を報告し意見を聴取したところであり、主要な指摘事項は以下の通りである。

- ・ 新型コロナウイルス感染症が拡大する中、WEB 会議の活用等手法を工夫する中で、確実にモニタリングが実施されたことを評価する。
- ・ 違法伐採対策に取り組む企業において、過去の違法伐採対策モニタリング事業のモニタリング結果を踏まえて、その取り組み内容を充実させるなど、毎年度確実に改善が図られ、レベルアップが着実に続いていることを高く評価する。引き続き、各社がその精度を上げていく努力を継続することを期待する。
- ・ トレーサビリティレポートの入手は確実にされており、森林認証による合法性確認を行っているものについても、さらに現地確認による合法性の確認まで行われている取り組みも見られた。今後も、項目や記載内容に正確さを期すことに加え、合法性確認の一層の徹底・充実を期待したい。
- ・ DD システムに関する研修について、FSC の研修と同時に開催する場合は、研修報告書に DD システムに関する具体的な研修内容を記載されたい。
- ・ 伐採地域の現地確認が必要な場合は、安全確保に十分留意して実施されたい。

- ・ FIT 燃料用の木質バイオマスについても引き続き各社の DD システムに基づき適切にリスクアセスメントに取り組まれない。

日本製紙連合会としては、違法伐採対策を実施している会員企業に対して、製紙連事務局員のモニタリング結果及び監査委員会の意見をフィードバックし、各社の取り組みの改善に資することとしており、今後とも、違法伐採モニタリング事業の実施を通じて業界全体としての違法伐採対策の一層の充実を図っていく考えである。

#### 4. 終わりに

2007 年度から始まった違法伐採対策モニタリング事業も、今年で 14 回目を迎え、会員企業の間ではかなり定着してきたが、消費者の環境意識の高まりから合法性の担保された原料を使用した紙製品に対する要求は年々高まっているので、引き続き本事業の推進に万全を期して取り組んでいく。

また、今年度の各社の合法木材の利用状況については、登録実施機関である日本ガス機器検査協会に報告し、その確認を経て林野庁に報告される。

## （参考）製紙業界の違法伐採対策の経緯

2005年7月に英国で開催されたグリーンイーグルズサミットにおいて、違法伐採対策に対して具体的行動に取り組むことで先進各国が合意した。これを受けて、わが国では、グリーン購入法の判断基準が改正され、政府調達にあたって、2006年4月以降は合法性が証明された木材を用いなくてはならないということになった。

合法証明方法については、「違法伐採対策に係る林野庁のガイドライン」によって①「森林認証による方法」、②「団体認定による方法」、③「個別企業の独自の取り組みによる方法」が示されているが、製紙業界としては、③の「個別企業の独自の取り組みによる方法」を採用することとし、2006年4月以降、日本製紙連合会の会員企業は、それぞれの企業で独自の違法伐採対策に取り組んでいるところである。（その実施にあたっては、適宜、①の「森林認証による方法」や②の「団体認定による方法」を一部活用している。）

なお、これに先立って、日本製紙連合会は、2006年3月に「違法伐採問題に対する日本製紙連合会の行動指針」を策定し、業界全体として違法伐採問題に取り組んでいく姿勢を明確にしている。加えて、2007年3月には、「環境に関する自主行動計画」を改定し、違法伐採対策を自主行動計画の一環として位置づけた。その後、自主行動計画終了後の2012年4月に策定された「環境行動計画」においても、引き続きその一環として位置づけられている。

さらに、2007年度からは、会員企業の自主的な取り組みに、客観性と信頼性を担保するために、日本製紙連合会が会員企業の違法伐採対策をモニタリングするとともに、その結果について学識経験者、消費者団体関係者等で構成される第三者委員会の指導、助言及び監査を求める「違法伐採対策モニタリング事業」を実施するなど、業界全体としての違法伐採対策のより一層のレベルアップに努めてきた。14年目となる2020年度についても、会員企業の2019年度の違法伐採対策について「違法伐採対策モニタリング事業」のモニタリングを実施したところである。

監査委員会委員	林業経済研究所	永田 信氏
	全日本文具協会	大沼 章浩氏
	グリーン購入ネットワーク	深津 学治氏
	筑波大学大学院准教授	立花 敏氏
	Social-i	野村 恭子氏

2009年2月には、コピー用紙に係るグリーン購入法の判断基準が改正され、従来は古紙100%であったが、間伐材パルプ、森林認証材パルプ、あるいはその他持続可能性を目指したパルプに限り30%まではバージンパルプを配合できるようになった。このうち、その他持続可能性を目指したパルプについては、判断基準で定められた条件を満足させるために、製紙企業は調達方針及びトレーサビリティレポートによって森林の環境的優位性及び社会的優位性を確認するとともに、その取り組みの客観性及び信頼性を担保するために、「違法伐採対策モニタリング事業」を活用することとなった。2010年2月には印刷情報用紙に係るグリーン購入法の判断基準が改正され、40%まではバージンパルプを配合できるようになったが、このうち、その他持続可能性を目指したパルプについてはコピー用紙と同じ扱いとなった。

なお、米国においては、違法伐採対策として2008年にレイシー法が改正されて、紙製品を含む木材製品を米国に輸出するにあたっては、輸出申告時に、品名、価格、数量と共に木材が伐採された産地国と木材の樹種を申告しなくてはならなくなった（ただし、現時点において、紙パルプには適用されていない）。また、EUにおいては、違法伐採対策として2010年に「EU木材規制法（違法伐採によって取得された林産物を規制する規則）」が制定され、これによって2013年3月より違法伐採された木材、あるいはそれら木材から生産された林産物をEU域内で販売することは禁止されている。さらに、オーストラリアにおいても「違法伐採禁止法（Illegal Logging Prohibition Bill 2012）」が2012年11月28日に議会において可決され、2014年から施行されている。

また、2016年5月に三重県で開催された伊勢志摩サミットにおいて、主催国として違法伐採対策に対するより積極的な姿勢を示すため、2016年5月20日に議員立法で「合法伐採木材等の利用及び流通の促進に関する法律（クリーンウッド法）」が制定されたところである。（2017年5月20日より施行）

クリーンウッド法においては、木材及び木材製品を取り扱う事業者は、官需、民需を問わず、全て木材、木材製品の合法性を確認するよう努めなければならない（努力義務）ことになった。この確認行為は、EUの木材規制法と同様にデューディリジェンス（DD）として行わなければならない。また、この法律に基づいて合法性の確認を行う事業者は、国が認定する登録実施機関に登録することができる（任意）ことになった。国は、この法律の施行に必要とされる場合には、指導、助言、報告徴収及び立入検査を行うことができるとされている。

日本製紙連合会は、このクリーンウッド法の制定に対応して、2017年度（2017年5月20日以降）から取り扱う全ての木材原料についてDDを行うために、EUの木材規制法、米国のレイシー法、豪州の違法伐採禁止法のDDにも対応できる製紙業界としての独自のDDシステムを構築するため、「日本製紙連合会・合法証明DDマニュアル」を作成したところである。

さらに、2017年10月27日には下記の5団体がクリーンウッド法の登録実施機関として告示され、クリーンウッド法の登録が実施できるようになったところである。

登録実施機関	（公財）日本合板検査会
	（公財）日本住宅・木材技術センター
	（一財）日本ガス機器検査協会
	（一社）日本森林技術協会
	（一財）建材試験センター

（注）2018年11月27日（一社）北海道林産物検査会が追加され登録実施機関は6団体となった。

日本製紙連合会は、（一財）日本ガス機器検査協会に団体一括代理申請を行い、2018年3月19日付で27社が木材関連事業者として登録されたところである。その後、2018年12月3日付で1社、2019年4月26日付で2社が追加登録されて現在は30社となっている。

なお、クリーンウッド法に基づく登録及び合法証明のためのDDシステムについても、引き続き「違法伐採対策モニタリング事業」によって客観性及び信頼性を担保していく考えであり、昨年度の違法伐採モニタリング事業から、各社が作成した合法証明DDシステムに基づく調査を行っている。

## 参考資料

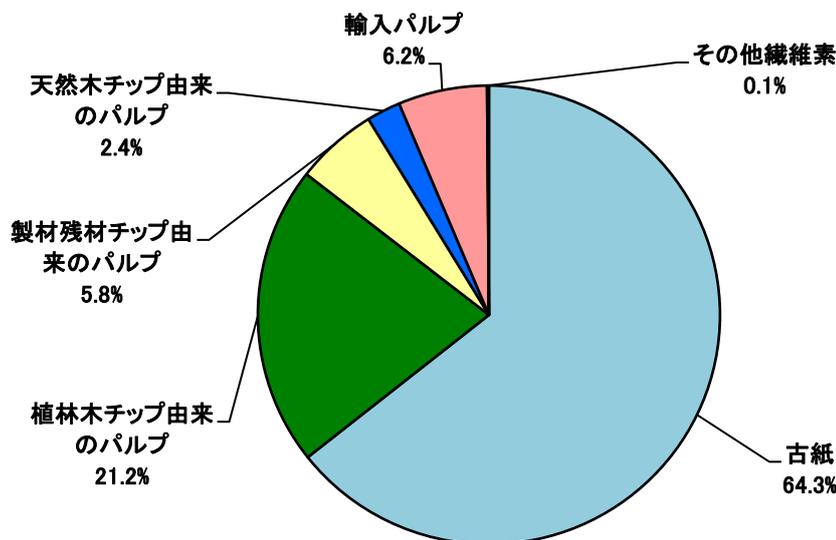
### 製紙業界の原料調達動向（2019年）

2019年の原材料需給の状況については、今年2月の理事会で報告済であるが、原材料調達にあたっての国内材の有効利用の状況や森林認証材の利用状況など違法伐採に係るデータを加え、改めてとりまとめた資料である。

#### 1. 製紙業界の原料調達の現状

わが国の2019年の紙・板紙合計の生産量は2,540万t、製紙原料消費量は2,582万tであった。原料構成比で見ると、古紙（古紙パルプを含む）が1,661万tで64.3%、パルプが918万tで35.5%、その他繊維素が3万tで0.1%となっている。また、パルプのうち、国産パルプが757万tで29.3%であり、その内訳としては、植林木チップ由来のパルプが546万tで21.2%、製材残材チップ由来のパルプが149万tで5.8%、天然木チップ由来のパルプが61万tで2.4%となっている。輸入パルプは161万tで6.2%となっている。

繊維原料消費割合（2019年）



資料：日本製紙連合会資料、経済産業省統計、財務省「通関統計」

注：天然木チップ由来のパルプ2.4%のうち、

2.2%は、里山で生産された国産の天然林低質材パルプ、

0.2%は、森林認証を受けた輸入の天然林低質材パルプである。

## (1) 古紙

古紙の消費は、前年比 2.6%減の 1,652 万 t、2 年連続のマイナスとなった。古紙の利用率は、紙・板紙合計で 64.3%、2018 年から横ばいとなった。うち紙分野は、37.3%から 36.6%へ 0.7 ポイント低下、板紙分野は 93.4%から 93.5%へ 0.1 ポイント上昇した。

日本製紙連合会では、ゴミの減量化や森林資源保全の観点から古紙の利用率を 2020 年度までに 65%に高めるという目標を定め、古紙利用の拡大に努めている。古紙はリサイクルを図る観点で環境にやさしい原料であるため、林野庁のガイドラインでは合法証明は必要とされていない。

古紙の輸出については、前年に比べて 16.9%減の 314 万 t となった。中国政府が廃棄物輸入規制を強化し、中国向けが大幅に減少したこと等により、2 年ぶりのマイナスとなった。その結果、2019 年の古紙回収量 1,979 万 t に対する輸出量の比率は 15.9%となり、2018 年より 2.4 ポイント低下した。

### 古紙利用率(製紙原料に占める古紙の比率 %)推移

	95 年	00 年	05 年	10 年	15 年	16 年	17 年	18 年	19 年
紙	26.7	32.1	37.5	40.5	40.2	39.2	37.9	37.3	36.6
板紙	87.6	89.5	92.6	92.8	93.5	93.8	93.8	93.4	93.5
平均	53.4	57.0	60.3	62.5	64.3	64.2	64.1	64.3	64.3

資料：経済産業省「紙・パルプ統計」

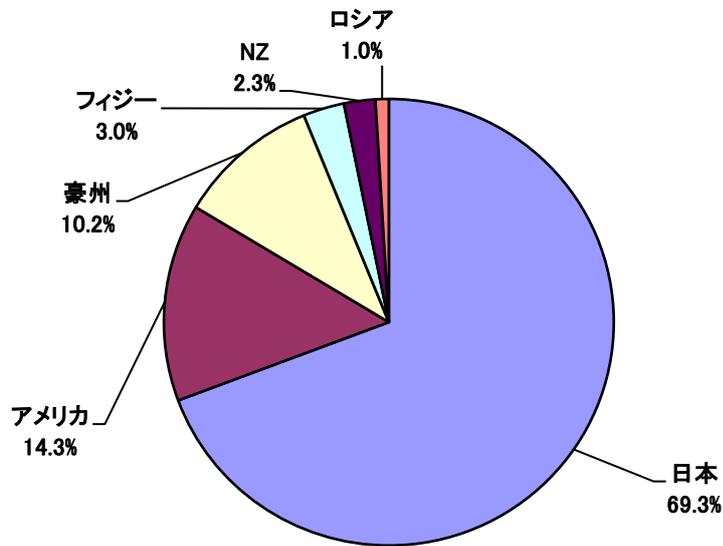
## (2) パルプ材(国産パルプの原料)

パルプ材の消費は、前年比 2.5%減の 1,579 万 t で、針葉樹 471 万 t、広葉樹が 1,109 万 t となっている。

針葉樹の輸入先は、アメリカ、豪州、ニュージーランド(NZ)など違法伐採のリスクが低い先進国を中心に 5ヶ国となっているが、アメリカ、豪州の 2ヶ国で 80% (日本を除く輸入量計をベースとする) を占めている。

注：次ページの円グラフには国産(日本産)パルプ材が含まれている。従って比率は国産パルプ材を含めた数値となっている。

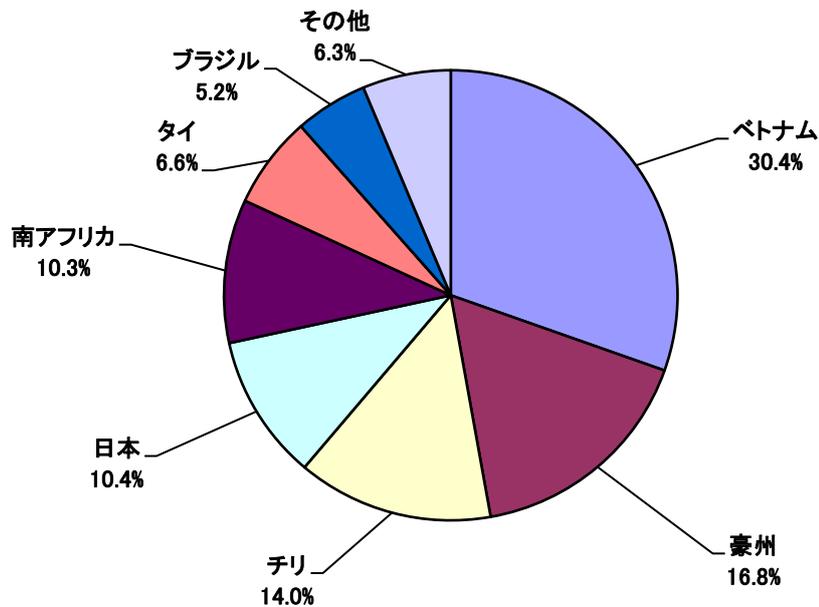
### 針葉樹の調達先 <2019年>



資料：日本製紙連合会

広葉樹の輸入先はベトナム、豪州、チリ、南アフリカ、タイ、ブラジルなど 11 カ国となっており、ベトナム、豪州、チリ、南アフリカの 4 ヶ国で 80%（日本を除く輸入量をベースとする）を占めているが、そのほとんどが違法伐採の可能性が低い植林木である。

### 広葉樹の調達先 <2019年>

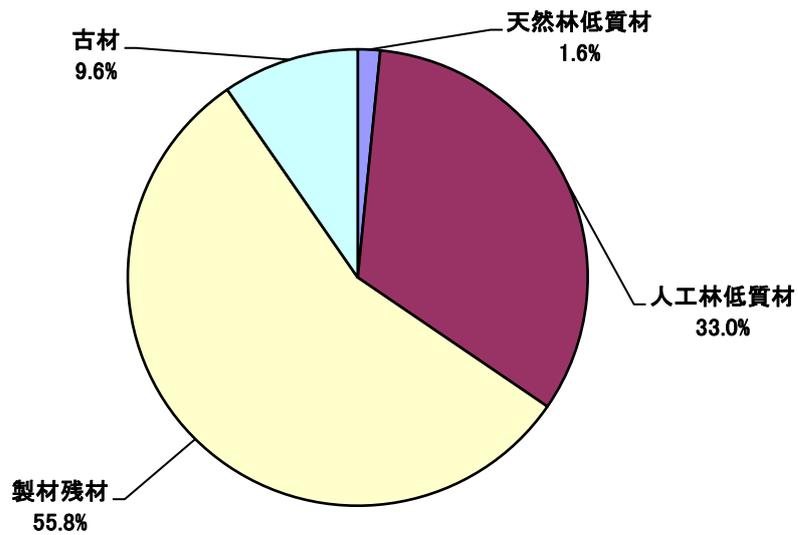


注：その他 6.3%の内訳は、インドネシア 2.8%、ニュージーランド 1.5%、マレーシア 1.5%、エクアドル 0.5%、アメリカ 0.04%

資料：日本製紙連合会

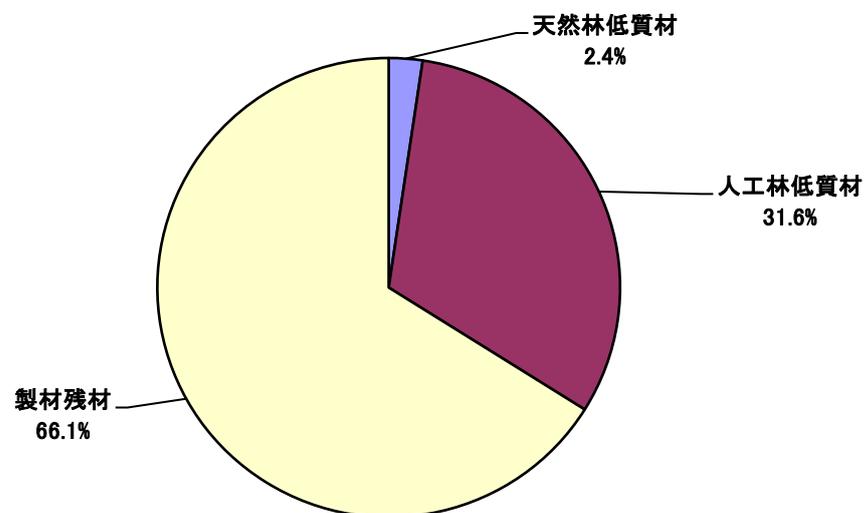
針葉樹の材種は、国産、輸入ともに製材残材が主体で、その他は製材に利用されない間伐材、病虫害材、解体材などの未利用材が多くなっている。製材残材や未利用材は、未利用資源の有効活用を図る観点で環境にやさしい原料であるため、林野庁のガイドラインでは合法証明は必要とされていない。

国産針葉樹 <2019年>



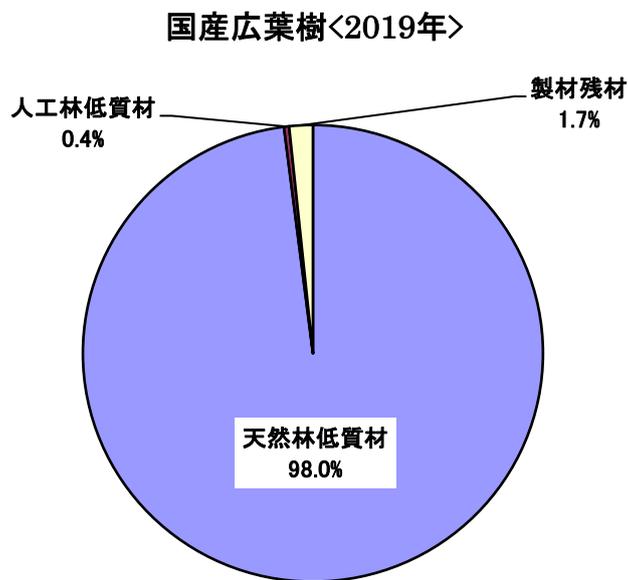
資料：日本製紙連合会

輸入針葉樹 <2019年>

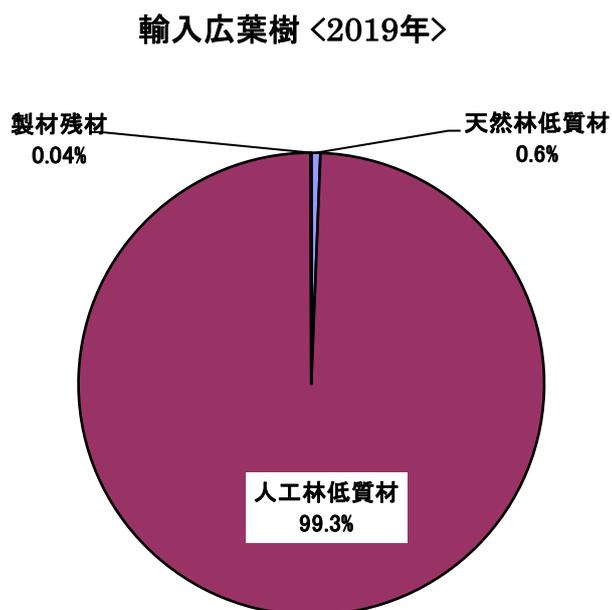


資料：日本製紙連合会

広葉樹の材種は、国産広葉樹では旧薪炭林等からの低質材が 98%を占めている。また、輸入広葉樹では木材チップ用に造成されたユーカリ、アカシア等違法伐採の可能性が低い植林木が 99%を占めている。



資料：日本製紙連合会

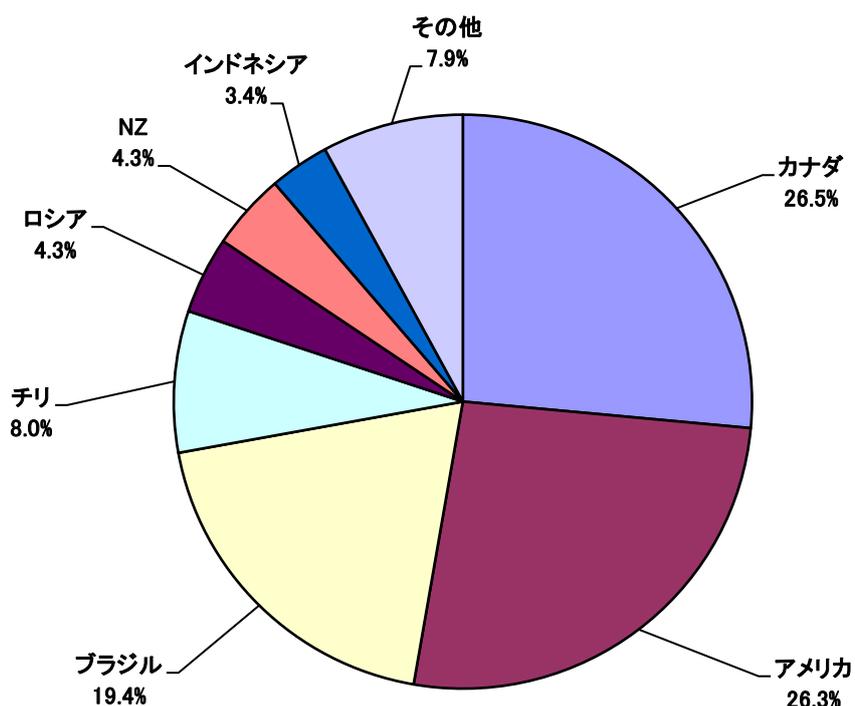


資料：日本製紙連合会

### (3) 輸入パルプ

輸入パルプ（製紙用）は、2019年は前年比1.5%増の161万tとなり、2年ぶりのプラスとなった。ただ、リーマン・ショックの影響で急減した2009年以降は、自社製パルプの優先使用の流れが続いていること等から、低レベルで推移している。輸入先は、カナダ、アメリカ、ブラジル、チリなど27ヶ国に及んでいるが、カナダ、アメリカ、ブラジル、チリ、ロシア、ニュージーランド（NZ）、インドネシアの7ヶ国で92%を占めている。ブラジルやニュージーランドからの輸入は開発輸入が主体である。近年、その多くが森林認証材（CoC（Chain of Custody）認証）あるいは認証された管理木材（CW（Controlled Wood））のパルプとなっている。

パルプ(製紙用)輸入国のシェア(2019年)



注：その他の7.9%の内訳は、スウェーデン3.0%、フィンランド2.7%、大韓民国0.8%、中国0.5%、ドイツ0.2%、フィリピン0.2%、スペイン0.2%、フランス0.1%、タイ0.1%、ミャンマー0.1%、以下、オーストリア、ノルウェー、ウルグアイ、ネパール、南アフリカ共和国、チェコ、シンガポール、台湾、ポーランド、オーストリア 10ヶ国で0.1%

資料：財務省通関統計

## 2. 間伐材利用の推進

間伐材利用を推進することは、森林資源の健全な整備に寄与するのみならず、わが国の京都議定書第一約束期間の森林吸収源 3.8%の確保を通じて、地球温暖化の防止にも大きく貢献したところである。わが国は 2015 年 12 月にパリで開催された COP21 において、パリ協定の CO<sub>2</sub> 削減目標として 2030 年に 2013 年比で 26.0%削減すると表明しているが、そのうち 2.0%は森林吸収源で対応することとなっており、引き続き間伐材の利用を推進する必要がある。また、違法伐採対策に係る林野庁のガイドラインにおいても、間伐材を始めとする未利用材については合法証明を必要としないとされている。わが国の製紙各社は、従来から未利用資源の有効活用の観点から間伐材を積極的に利用してきたが、日本製紙連合会は 2012 年 4 月に「環境行動計画」を策定し、国内の森林整備の促進、地球温暖化の防止、資源の有効利用の推進のために間伐材の利用量の増大に積極的に取り組むという業界の姿勢を改めて明らかにしている。さらに、2009 年及び 2010 年のグリーン購入法の判断基準の改正により、コピー用紙及び印刷用紙において、間伐材パルプが評価されることになったが、その際には、間伐材利用に係る林野庁のガイドラインに基づいて間伐証明書を添付しなくてはならないことになっている。このため、引き続き、グリーン購入法適合製品において間伐材の利用を促進するためには、証明書付間伐材の供給を増加させる必要があるが、現時点では、その供給量は極めて限られている。

単位：千 BDT

	2014	2015	2016	2017	2018	2019
間伐材 (林地残材含む)	767 < 48>	729 < 38>	704 < 40>	703 < 39>	722 < 37>	703 < 43>
虫害材	1	1	1	1	1	1
古材	312	360	332	318	316	318

資料：日本製紙連合会

注 1. 数量は推定を含む

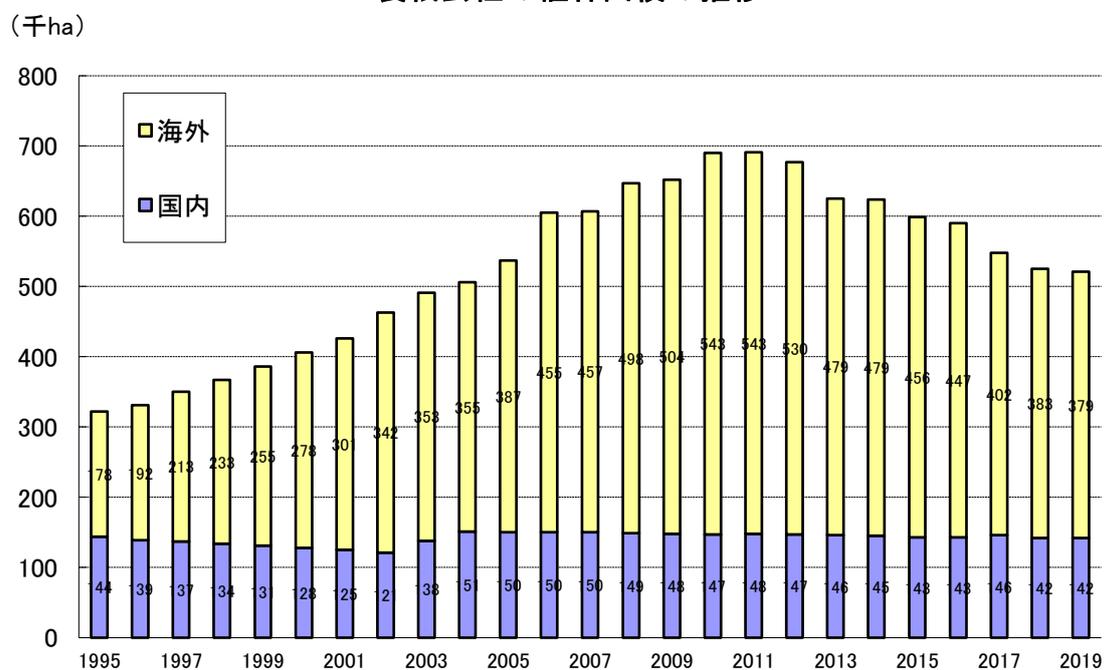
2. 古材には家屋解体材の他、ダンネージ、パイル等を含む

3. < >は証明書付き間伐材

### 3. 植林事業の推進

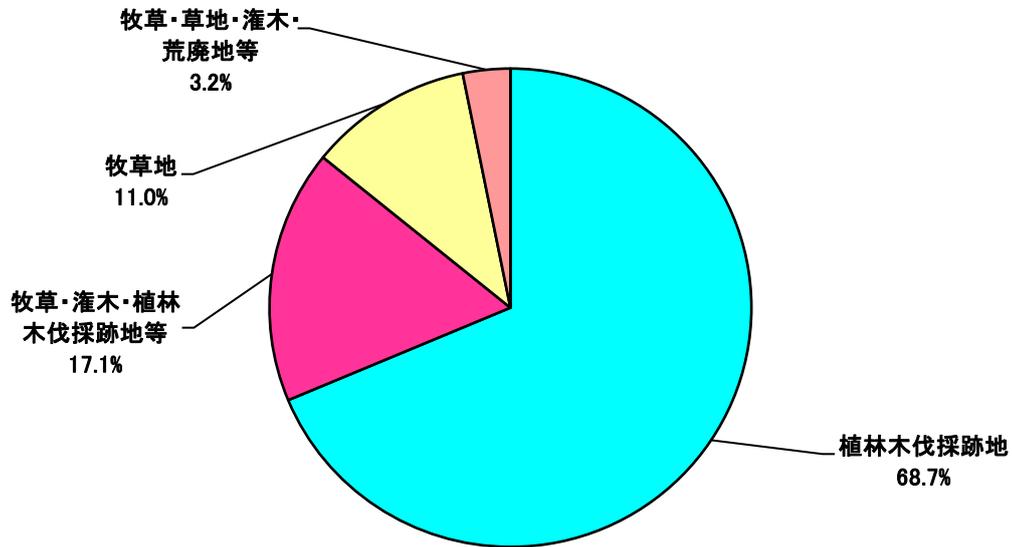
適切な森林経営が行われている自社植林地から調達された植林木チップは、違法伐採が行われていない環境に配慮された原料である。このため、その調達の拡大を目指して、わが国の製紙各社は、植林木伐採跡地の他、牧草地、荒廃地等の無立木地において海外植林を推進しており、2019年末時点では、オセアニア、南米、アジア、アフリカの9ヶ国で24プロジェクト、37.9万haに達している。これによって、国内外で所有又は管理する植林面積は52.1万haとなった。

製紙会社の植林面積の推移



資料：日本製紙連合会

### 製紙会社の海外植林地の植林前の土地状況 (2019年)

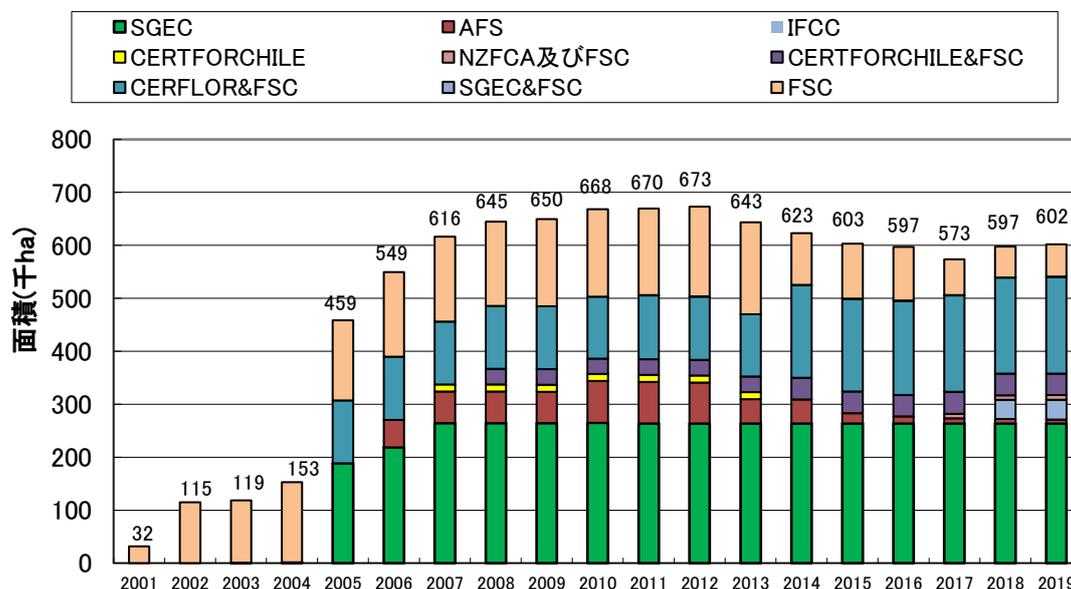


資料：海外産業植林センター、日本製紙連合会

#### 4. 森林認証の推進

持続可能な森林資源の育成とその木材利用の推進を図る森林認証を取得した木材チップやパルプは、違法伐採が行われていない環境に配慮された原料である。このため、わが国の製紙各社は、所有又は管理する自社林について FM (Forest Management) 認証を積極的に取得するとともに、製品の製造、流通についても CoC (Chain of Custody) 認証を数多く取得している。国内の自社林については、2016 年に PEFC と相互承認した日本の森林認証である SGEC を、海外の自社林については国際的な森林認証である FSC や PEFC (AFS、IFCC、NZFCA、CERFLOR、CERTFORCHILE) を取得しており、2019 年現在で森林認証を受けた自社林の面積は 60.2 万 ha に達している。また、調達する木材チップのうち、森林認証材の占める割合は 2018 年より 0.4 ポイント上昇して 23.7%となっている。なお、2015 年より FSC や PEFC によって認証された管理木材 (森林認証材ではないが、合法性や社会的、環境的な優位性などについて第三者機関による認証を受けている木材) について調査を開始しており、森林認証材と認証された管理木材を合わせると、その占める割合は 73.2% (特に輸入材については 100.0%) となっている。

### 森林認証取得面積(累計)の推移



資料：日本製紙連合会資料

注1：SGEC：Sustainable Green Eco System（緑の循環認証会議；PEFCと相互承認）

2：FSC：Forest Stewardship Council（森林管理協議会）

3：AFS：Australian Forestry Standard（オーストラリア林業基準；PEFCと相互承認）

4：IFCC：Indonesian Forestry Certification Cooperation（インドネシア森林認証協力機構；PEFCと相互承認）

5：NZFCA：New Zealand Forest Certification Association（ニュージーランドの森林認証制度；PEFCと相互承認）

6：CERFLOR：Programa Nacional de Certificacan Florestal（ブラジルの森林認証プログラム；PEFCと相互承認）

7：CERTFORCHILE（チリの森林認証プログラム；PEFCと相互承認）

8：NZFCAとCERFLORとCERTFORCHILEとSGECの一部はFSCを重複取得

**森林認証材及び認証された管理木材の利用状況(2019年)**  
**[ 木材チップ ]**

単位:千BDT

		針葉樹		広葉樹		合計	
		数量	割合	数量	割合	数量	割合
国内	①認証材	185	5.6%	0	-	185	4.1%
	②認証管理木材	0	-	0	-	0	-
	①+②	185	5.6%	0	0.0%	185	4.1%
	集荷量計	3,314		1,180		4,495	
輸入	①認証材	494	33.7%	3,135	31.0%	3,630	31.3%
	②認証管理木材	974	66.3%	6,993	69.0%	7,967	68.7%
	①+②	1,468	100.0%	10,128	100.0%	11,597	100.0%
	集荷量計	1,468		10,128		11,597	
合計	①認証材	679	14.2%	3,135	27.7%	3,815	23.7%
	②認証管理木材	974	20.4%	6,993	61.8%	7,967	49.5%
	①+②	1,653	34.6%	10,128	89.6%	11,782	73.2%
	集荷量計	4,783		11,309		16,091	

資料:日本製紙連合会

注:割合は各集荷量計に対する森林認証材及び認証管理木材の割合